

# 朝鮮時代のハングル学習教材とその特徴

東国大学校 博士課程修了 姜 侑住 著  
東国大学校 教授 朴 鍾培 著  
獨協大学 教授 川村 肇 訳

## Teaching Materials for Hangeul in Joseon Dynasty and their Characteristics

Kang, You-Ju Ph.D. Candidate, Dongguk University  
Park, Jong-Bae Professor, Dongguk University  
Translated by KAWAMURA Hajime

姜侑住（カン・ユジュ 강 유주）

韓国教員大学、ソウル教育大学大学院、東国大学教育学部大学院で教育史・教育哲学を専攻。教育学博士。博士論文は『朝鮮前期のハングル普及と教育的活用に関する研究』。現在は小学校の教師として勤務しつつ、東国大学で非常勤講師を勤める。

朴鍾培（パク・ゾンベ 박 종배）

ソウル大学校、ソウル大学校大学院教育学科を経て、2003年、博士学位取得。2008年から東国大学校師範大学（教育学科）教授。

本論文は、教育史学会『教育史学研究』第30集第2号（2020年10月、1-27頁）に掲載された。

### I. 序論

この論文では、朝鮮時代にハングル字母を身に付けて、ハングルを読み書きすることができる能力を育むための教育用資料を「ハングル学習教材」と規定し、ハングル創製後、実際どのようなハングル学習教材が作られ、使われたのか、その特徴はどのようなものだったのかを調べることに目的がある。周知のように我々固有の文字であるハングルは、創製当時「訓民正音」<sup>1</sup>と言われており、その他に正音、諺文、諺字、反切<sup>2</sup>などとも呼ばれた。そうするうち

に、甲午改革とともに、ついに国文、つまり国の公式な文字という地位を獲得することになり<sup>3</sup>、20世紀に入って「ハングル」という新しい名前を付けられた。本論で「ハングル学習教材」という時の「ハングル」は、20世紀以後の「ハングル」ではなく、訓民正音から今日のハングルに至るまで、我が民族が作り、読み書きしてきた我々固有の文字に対する総称である。これに従って本論で議論の対象とするハングル学習教材は、その名前が訓民正音、諺文、諺字、国文のいずれかにかかわらず、朝鮮時代に我が固有の文字であるハングルを読み書きする能力を養うために作り、活用した様々な教育用資料を指す。実際このようなハングル学習教材は、訓民正音の頒布当時から作られ、それ以後も絶えず作成され続けた。「人々をして簡単に身に付けさせ、毎日便利に使わせた」というのが、訓民正音の創製目的の中の一つだっただけに<sup>4</sup>、そうした目的を実現させるためには、新しい文字を教え、学ぶための教材がどうしても必要だったからである。

1443（世宗25）年に創製され、1446（同28）年に頒布された訓民正音は、教育の機会から疎外されていた下層民や婦女子の文字だった、という世間の間違った認識とは違い、王室はもちろん、両班、平民、奴婢に至るまで、朝鮮時代の全ての階級と階層が使っていた文字だった<sup>5</sup>。我らの固有の文字の創製で、漢字を学ぶことができない庶民たちまでも、自分の意思をそのまま記録しうる表記手段を持つようになったが<sup>6</sup>、それには官の積極的なハングル普及努力が

- 
- 1 訓民正音は「文字体系」でもあり、その文字体系を盛り込んだ「書籍」でもある。以下では、書籍としての訓民正音は『訓民正音』と表記する。
  - 2 従来反切は、声母と韻母で漢字音1音節を表示する方法で「反切本文」ともいう。反切は漢字音を表すため、反切上字の声と、反切下字の韻を合わせ、別の一つの音を表す方式を言う。反切という名称は、本来漢字の字音を表示するため、二つの文字を合わせて一つの文字の音を表すことを意味しており、15世紀以後、訓民正音が、初声、中声、終声を合わせて文字を成すようにした事実と結び付き、訓民正音を指して言う別名として良く知られている。
  - 3 『高宗実録』高宗32（1895）年5月8日、勅令第86号で、〈公文式〉を裁可し、頒布する……、第9条、法律、命令は全て国文を本として、漢訳を付し、もしくは国、漢文を混ぜて用いる、とした。
  - 4 『訓民正音』の「序文」には「国之語音、異乎中国、与文字不相流通、故愚民有所欲言、而終不得伸其情者多矣。予為此憫然、新制二十八字、欲使人人易習、便於日用矣耳」とある。
  - 5 キム・インフェ（김인회）「朝鮮時代士大夫のハングル使用と意味」韓国学中央研究院『精神文化研究』35巻4号、2012年、36頁。

重要な役割を担った。例えば訓民正音が頒布された世宗28（1446）年12月には、吏科と吏典取才の時に『訓民正音』を同時に試験するようにし<sup>7</sup>、翌年には次の式年から、まず『訓民正音』を試験し、合格してから次の試験（本試験）をするようにした<sup>8</sup>。『訓民正音』が科挙試験の先修科目となったわけである。世祖治世にも式年の講經試験で『訓民正音』と『東国正韻』を講ずることを望めば、聞き入れるようにした<sup>9</sup>。このように朝鮮政府は、試験を方便として官僚予備軍が訓民正音を身に付けるように推奨した。その他に、王室教育でも王孫教育を担当する書筵官の中に諺文を担当する者がいて<sup>10</sup>、書筵官をして『大学衍義』を諺字、つまりハングルで、語調詞を使って王の親戚の中で文理が通じなかった者たちを教えようとさせたという記録もある<sup>11</sup>。官のこのようなハングル普及努力は、必然的にハングルを学び、身に付けるための教材の流通とともに進行することになり、実際にハングル創製初期から「ハングル学習教材」と呼ぶにふさわしい文献が確認される。

まずこの論文で検討することになるいくつかのハングル学習教材について、簡単に見てみると次のようになる。一番最初のハングル学習教材は『訓民正音解例本』<sup>12</sup>の「例義」と「解例」である<sup>13</sup>。本論でより詳しく見ることになるが、『訓民正音』の「例義」は、世宗王が序文に続き、新しく作った諺文28字の音価と運用法などを簡単に説明したもので、「解例」はこれに対して集賢殿博士

6 カン・シンハン（강신항）『修訂増補 訓民正音研究』成均館大学校出版部、2003年、4頁。

7 『世宗実録』世宗28（1446）年12月26日の条には「今後吏科及吏典取才時、訓民正音、並令試取、雖不通義理、能合字者取之」とある。

8 『世宗実録』世宗29（1447）年4月20日の条には「後式年為始、先試訓民正音、入格者許試他才、各司吏典取才、並試訓民正音」とある。

9 『世祖実録』世祖10（1464）年9月21日の条には「每式年直赴会試、又於式年講學子四書三經、自願講他經者及欲講左伝、綱目、宋元節要、歷代兵要、訓民正音、東国正韻者聽」とある。

10 『世宗実録』世祖29年11月14日の条には「今書筵官十人、除諺文医書、僅有臣等六人輪次進講」とある。

11 『文宗実録』文宗即位（1450）年12月17日の条には「始講大学衍義、上在東宮、命書筵官、将大学衍義、以諺字、書語助、欲教教室之未通文理者」とある。

12 『訓民正音』の原本に該当する『訓民正音解例本』（以下、『訓民正音』）は、世宗王の「序文」と「例義」からなる本文、そして集賢殿の博士たちが書いた「解例」と鄭麟趾の「解例序」で構成されている。アン・ビョンヒ（안병희）『訓民正音研究』ソウル大学校出版文化院、2007年、46頁参照。

13 前注、同カ所。

たちのより詳しい解釈と用法の提示が主たる内容である。この「例義」と「解例」が初期にハングル学習教材、つまり新しい文字であるハングルを身に付けて使う時、教科書のような役割を果たしたといえることができる。特に「解例」は新しく創製した諺文28字に「詳しく解釈を加え、諸人を諭せ」という王の命を受けて鄭麟趾などが作ったもので、師匠がいなくては学べないようなものではなく、自然と分かるように作られた点で<sup>14</sup>、名実ともにハングル学習教材だと言える。

一方、世祖治世以後、正音、つまりハングルを活用した書籍の出版が本格化し、これら正音文献の巻頭に、まずハングルを学習させる目的からハングル学習教材を入れ込む場合が多い。1459年に刊行されたハングル仏教文献である『月印釈譜』に載せられている「訓民正音諺解」が、そのようなハングル学習教材の典型的な例である。『月印釈譜』の巻頭に収録されたこの「訓民正音諺解」は、『訓民正音』の御製序文と例義をハングルで翻訳したものである<sup>15</sup>。次に注目されるハングル学習教材は、崔世珍（1468－1542）の書いた漢字学習書『訓蒙字会』に掲載されている「諺文字母」である。この『訓蒙字会』はハングルで漢字の音と意味を表記し、ハングルだけ知っていれば、一人でも漢字を身に付けることができるように作られた革新的な漢字学習書である。この革新的な漢字学習書を万全に機能させる前提条件であるハングル学習のため、貼付された教材がすなわち「諺文字母」だった<sup>16</sup>。この他にも、仏教の真言集、朝鮮後期の様々な韻書はもちろん、開化期の国漢文混用教科書などにもハングル学習教材が収録されている。このように訓民正音創製当時から、朝鮮王朝末期に至るまで、様々な形態のハングル学習教材が作られ、ハングル学習に活用された。以下、本論では、国語学<sup>17</sup>、書誌学<sup>18</sup>など、関連する分野で行われた

14 『世宗実録』世宗28（1446）年9月29日の条に「（前略）癸亥冬、我殿下創制正音二十八字、略掲例義以示之、名曰訓民正音。（中略）遂命詳加解釋、以諭諸人。於是、臣與集賢殿應教崔恒、副校理朴彭年・申叔舟、修撰成三問、敦寧注簿姜希顔、行集賢殿副修撰李塏・李善老等謹作諸解及例、以敘其梗概、庶使觀者不師而自悟」とある。下線部は筆者による。以下同じ。

15 ただし、菌頭正菌音についての既定が追加され、内題である「世宗御製訓民正音」がある第1章に若干の変改が加えられた。前掲アン・ビョンヒ『訓民正音研究』、4頁参照。

16 本論では、「諺文字母」が『訓民正音』とともに崔世珍の手になるものと見ているが、「諺文字母」の作成主体と作成時期については学界でも異見が存在する。これに関して詳しくは、カン・チャンソク（강창석）「諺文字母の作成主体と時期について」『言語と情報社会』第22号、西江大学校言語情報研究所、2014年、参照。

研究成果を積極的に活用し、朝鮮時代のハングル学習教材にはどのようなものがあり、それらはどのような内容、形式の特徴を持っているかについて、より詳しく検討する。ただ本論は、究極的にハングルの創製と活用が、我々の教育史にどのような影響をもたらしたのかについて明らかにすることに関心があるので、こうした観点から朝鮮時代のハングル学習教材の特徴を分析し、その意義を議論していこうと思う。

## Ⅱ. 初期のハングル学習教材：『訓民正音』の例義と解例、そして諺解

### 1. 『訓民正音』の例義と解例

実録に記録されたように<sup>19</sup>、世宗王は即位25（1443）年12月に自ら諺文28字を作り、名前を「訓民正音」とした。古篆に倣ったこの諺文字は、初・中・終声に分かれ、合体して文字になる。『訓民正音解例本』の御製序文の次に来る例義では、新しく作られた諺文28字の音価とその運用法、傍点の規定について説明している。それでは、例義のこの説明は、新しく作られた文字を身に付けて書くのに充分だったのだろうか。別言すれば、この例義を教材にして諺文を身に付けるのに、不足はなかったのだろうか。これに関連して注目する必要があるのが鄭麟趾（1396－1478）が書いた、次の解例序である。

（前略）癸亥年秋に我が王が正音28字を初めてお作りになり、例義を簡略にお見せなさって、名称を『訓民正音』とされた。物の形状を象って、文章は古典を模倣し、音によって、音は七調に合わさり、三極の意味と利器の精妙さが具備・包括されていないものがなく、①28字として転換窮まりなく、簡略ながらも要領がよく、詳細ながらも精通するようになった。そうしたわけで、賢い人は朝から半日経つ前にこれを理解し、愚かな人も十日で学べるようになる。これで文章を解釈すればその意味を理解し、これで訟事を聴断す

- 
- 17 前掲アン・ビョンヒ『訓民正音研究』、안병희『国語史文献研究』新旧文化社、2009年、姜信沆『修訂増補 訓民正音研究』成均館大学校出版部、2003年、同『訓民正音創製と研究史』景仁文化、2010年、キム・スロン（召唎翁）『世宗大王と訓民正音』知識産業社、2010年、同『朝鮮時代の訓民正音発達史』亦樂、2013年、等参照。
- 18 ベク・ドゥヒョン（曷斗憲）『ハングル文献学』太学社、2015年、参照。
- 19 『世祖実録』世宗25（1443）年12月30日の条に「是月、上親制諺文二十八字、其字倣古篆、分爲初中終聲、合之然後乃成字、凡于文字及本國俚語、皆可得而書、字雖簡要、轉換無窮、是謂訓民正音」とある。

ればその実情が分かるようになる。字韻は清濁を能く分別することができ、楽曲は陽律陰呂が能く和合できて使え、具備しないことがなく、どこへ行っても通じないところが無く、たとえ風の音、鶴の鳴き声であれ、鶏の鳴き声であれ、犬の吠える声までも、全て表現することができるようになった。②最後に詳細に解釈し、多くの人々を悟らせるよう命じられたので、これに対して臣が集賢殿應教崔恒、副校理朴彭年と申叔舟、修撰成三問、敦寧府主簿姜希顔、行集賢殿副修撰李埏・李善老などと共に、謹んですべての解釈と凡例を書き、その梗概を叙述し、これを見た人に師匠がいなくても、自ら悟ることができるようにした<sup>20</sup>。〔後略〕（丸付数字と下線は引用者。以下同じ）

上記の序文によれば、世宗王が創製した正音28字は、その音価と運用法などについての説明である例義と共に「訓民正音」という名前で頒布された。①に見るように、この新しい文字は、活用が無窮無尽蔵でありながらも、「賢い人は朝から始めて昼になる前にこれを理解し、愚かな人も十日で学ぶことができる」というごとく、大変学びやすい特徴を持っていた。しかし②に見るように、世宗王は自分の書いた例義に加え、正音28字について「詳細に解釈し、多くの人々を悟らせよ」と命を下した。そしてこの命令に従い、崔恒（1409－1474）、朴彭年（1417－1456）、申叔舟（1417－1475）、成三問（1418－1456）など、集賢殿博士たちが再び「全て解釈と凡例を書いてその梗概を叙述し、これを見た人に師匠がいなくても自ら悟ることができるよう」作ったのが『訓民正音』の「解例」である。

序文に現れたこのような来歴からすると、ハングル学習教材という側面では、世宗王が自ら作成した「例義」より、集賢殿の博士たちが執筆した「解例」が一層完成度が高いように見られる。例義について、より詳しい解説で解例が誕生したためである。実際に叙述分量を計算してみると、例義が45文章に、全部

20 『世宗実録』世宗28（1446）年9月29日の条に「（前略）癸亥冬、我殿下創制正音二十八字、略掲例義以示之、名曰訓民正音。象形而字倣古篆、因聲而音叶七調、三極之義、二氣之妙、莫不該括。以二十八字而轉換無窮、簡而要、精而通、故智者不崇朝而會、愚者可浹旬而。以是解書、可以知其義、以是聽訟、可以得其情。字韻則清濁之能卜、樂歌則律呂之克諧、無所用而不備無所往而不達、雖風聲鶴唳雞鳴狗吠、皆可得而書矣。遂命詳加解釋、以諭諸人。於是、臣與集賢殿應教崔恒、副校理朴彭年・申叔舟、修撰成三問、敦寧注簿姜希顔、行集賢殿副修撰李埏・李善老等謹作諸解及例、以敘其梗概、庶使觀者不師而自悟」とある。



で406文字で書かれている一方、解例は397文章に4,931字で、解例が文章数では8倍、文字数では12倍を超えている<sup>21</sup>。そして叙述の方式の面でも、例義が別に目次を定めず、字母の音価と運用法などを説明していくのと異なり、解例はこれを制字解、初声解、中声解、終声解、合字解の5解と、用字例の1例に分けて体系的に説明している<sup>22</sup>。

参考に、5解と1例の核心的な内容を簡単に見てみると<sup>23</sup>、まず「制字解」では新文字の制字原理と運用方法についての陰陽五行を中心にした性理学的な観点と、人間の音声についての声韻学的な理解を基本にして説明している。そして「初声解」では、初声の意味（韻書之字母）を繰り返し説明してその例を挙げ、「中声解」では中声の意味（字韻之字母）を説明して、例義にない中声字の間の合声両声と中声「ㄹ」の特徴についても明らかにしている。さらに「終声解」では終声の意味（承初中而成字韻）とともに、声の緩急という次元から終声の特性を説明している。そして「合字解」では基本的に音素文字である訓民正音が合字という過程を通して無限の文字の運用が可能であることを総合的に説明しており、最後に「用字例」では、訓民正音を使って実際に我々の言葉をどのように表記することができるのかを94の用例を通して示しているが、この部分も例義では見るができなかったのである。

このように「解例」は諺文28字の制字原理から、実際に我々の言葉の表記用例に至るまで、「例義」より非常に体系的で詳細に説明している。そして一文字方式による教育と、特定の一語の例示を通して説明する統文字方式の教育が結合されていること<sup>24</sup>、また解例が例義より一歩進んだハングル学習教材だという評価ができるようになっている。しかし解例で明らかにしている制字原理をそのまま理解するためには、韻書と易学についての深い素養が必要であり<sup>25</sup>、解例の全ての説明が漢文になっている点は、ハングル学習用資料として、一般民衆までが広く使うのを難しくしているという問題があった。このような点で

21 チョン・ウヨン（정우영）『《訓民正音》解例本の「例義篇」構造と「解例篇」との相関関係』『国語学』第72集、2014年、145頁、参照。

22 このように五つの「解説（解）」と一つの「例示（例）」が掲載されており、これを合わせて「解例」と呼ぶ。

23 キム・ユボム（김유범）『『訓民正音』〈例義〉と《解例》の成立過程についての再検討』ウリマル学会『ウリマル研究』55集、2018年、9-15頁、参照。

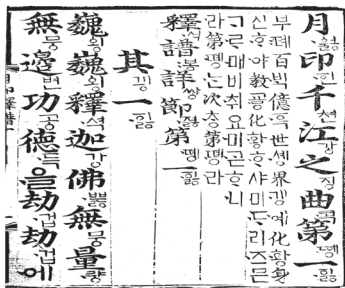
24 前掲キム・スロン『世宗大王と訓民正音』、449頁。

25 前掲アン・ビョンヒ『訓民正音研究』、204頁。

「訓民正音諺解」という新しいハングル学習教材の登場は注目に値する。

## 2. 『月印釈譜』の訓民正音諺解

朝鮮は儒教国家だったが、古から仏教と密接な関係を持っていた。仏教はとりもなおさず民衆の生活の一部だったため、朝鮮政府は皆にあまねく身近な仏教を通して民衆を教化しようとした<sup>26</sup>。訓民正音頒布直後『釈譜詳節』（1447年、世祖讚）と『月印千江之曲』（1447年、世宗讚）という正音仏教文献、つまりハングル仏教書籍が刊行されたことも、そのような趣旨で理解できる。下の【図1】に見られるように、『月印千江之曲』と『釈譜詳節』は、訓民正音で本文の漢字音と語助辞を表示し、漢文の原文を正音で解釈して、民衆が内容を簡単に理解して読めるようにした。



【図1】『月印千江之曲』



『釈譜詳節』

ところが問題は、このように訓民正音を使って刊行した仏教書籍を民衆が読むためには、まず訓民正音、つまりハングルの身に付けねばならないという事実である。このような理由で、1459（世祖5）年に『月印千江之曲』と『釈譜詳節』を合冊した『月印釈譜』が刊行されるとき、本の一番最初に「訓民正音諺解」が掲載された<sup>27</sup>。『月印釈譜』に収録された「訓民正音諺解」は、現存する最も古い『訓民正音』諺解本であるが<sup>28</sup>、西江大学校図書館所蔵本を通し

26 キム・ムボン（召早号）「釈譜詳節 巻20研究」『仏教学研究』34集、仏教学研究会、2013年、293頁。

27 チョン・グァン（정광）「訓民正音の〈諺解本〉—高麗大図書館六堂文庫所蔵の『訓民正音』を中心に」『語文論集』88、民族語文学会、2020年、5頁。



て<sup>29</sup>、その姿を調べてみると次のようになる。



【図2】『月印積譜』の中の訓民正音諺解の冒頭頁と最終頁。

このように「訓民正音諺解」を『月印積譜』の巻頭に配置したのは、新しい文字学習を通した教育の意図を明らかにするものだった<sup>30</sup>。これと関連して『月印積譜』に掲載された、①釈譜詳節序文と、②御製月印釈譜序文を調べてみると、次のようになる。

- ①釈譜詳節序文：近年、(昭憲王后の)冥福を祈るために、今まで(出てきた)様々な經典から選り分けて、格別に一冊を作って名前を付けて「釋譜詳節」と言い、すでに順番を推し量って作ったことに頼って、世尊の道を成した姿を<絵で>描き、叶えて、また、正音に翻訳して人それぞれ分かりやすく三宝に進んで帰依するように願っている。<sup>31</sup>
- ②御製月印釈譜序文：昔の丙寅年に<ある>昭憲王后が亡くなるやいなや悲し

28 「訓民正音諺解」は、1446年から1447年頃に初めて翻訳され、刊行当時には、その題目は「訓民正音」だったが、1450年に「世宗御製」を追加し、「世宗御製訓民正音」に変わったものと推定される。チョン・ウヨン(정우영)「訓民正音と仏教教典の相關関係研究」『語文研究』43巻、4号、韓国語文教育研究会、2014年、34頁参照。

29 西江大学校図書館に所蔵されている『月印積譜』の初刊本は1972年に発見され、現在宝物745-1号に指定されている。

30 キム・スロン(김슬옹)『朝鮮時代の訓民正音発達史』ヨンラク、2012年、84頁。

31 『月印積譜』「釈譜詳節序」には次のようにある「(前略)頃애 因迫薦々々々 爰采諸經々々 別爲一書々々 이名之曰釈譜詳節이라호고 既挹所次々々 絵成世尊成道之迹々々고 又以正音으로 就加訳解々々노니 庶幾人人이 易曉々々야 而帰依三宝焉이니라」。

んでいる中で、やるべきことを知らなかったところ、世宗が私におっしゃるには、「亡くなった人の冥福を祈ることは、経を書き写す以上のことはないから、お前が釋譜を作って写せ」とおっしゃった。私が慈しみ深い仰せを受け、考えをより広くし、僧祐と道宣の二つの律師がそれぞれ系譜を作ったものがあるので、得てみるがその詳と略が同じではないので、二冊を合わせて「釈譜詳節」を作り、正音に翻訳して人それぞれに分かりやすくして世宗に献上した。世宗がご覧になり、すぐに讃える歌を作って名前を「月印千江」と言うのだから、今になって高く崇めることをどうして疎かにするのだろうか。<sup>32</sup>

上記二つの序文を見ると、『月印釈譜』は世祖の母后である昭憲王后の冥福を祈るため世宗の命を受けて編纂したもので、それを最初に刊行した時は特別な目的があった。上の序文で「正音に訳して意味を解いたら人それぞれ分かりやすく」、「正音に翻訳して人それぞれに分かりやすくして」としているように、本の内容を一般民衆まで簡単に分かるようにするためのものだった。これは一方で民衆になじみ深い仏教書籍を通してハングルを広く伝えようとしたとも考えられる<sup>33</sup>。「訓民正音諺解」が『月印釈譜』の巻頭に掲載されていたのは、このような脈絡でその背景を理解することができる。

『月印釈譜』の巻頭に収録された「訓民正音諺解」の内容を調べてみると、諺解の対象となる原テキストは『訓民正音』の本文、つまり世宗御製序文と例義の部分である。末尾に、漢音の歯音は、歯頭音と正歯音が区別されているという内容を追加したことだけ違いがある<sup>34</sup>。諺解の形式を見ると、前の【図2】で見られるように、本来漢文である『訓民正音』本文の各漢字にハングルで音を付け、漢文原文の句読処にハングルで語助詞を表記したあと、各区節の下にハングル

32 『月印釈譜』「御製月印釈譜序」には次のようにある（「前略」昔在丙寅<sup>ㄸ</sup>야 昭憲王后 | 奄棄榮養<sup>ㄸ</sup>야시닐 痛言在疚<sup>ㄸ</sup>야 罔知攸措<sup>ㄸ</sup>다니 이 世宗 謂余<sup>ㄸ</sup>야디 薦拔이 이 無如轉經니 汝宜撰譯釋譜<sup>ㄸ</sup>라 <sup>ㄸ</sup>야시닐 予受慈命<sup>ㄸ</sup>야 益用覃思<sup>ㄸ</sup>야 得見祐宜二律師 | 호 이 各有編譜 디 而詳略 不同거닐 爰合兩書<sup>ㄸ</sup>야 고 撰成釋譜詳節<sup>ㄸ</sup> 就譯以正音<sup>ㄸ</sup>야 이 俾人人易曉<sup>ㄸ</sup>라 <sup>ㄸ</sup>야 乃進<sup>ㄸ</sup>야 보니 시고 賜覽<sup>ㄸ</sup>야 輒製讚頌<sup>ㄸ</sup>야 名曰 月印千江이라 시<sup>ㄸ</sup> 니 其在于今<sup>ㄸ</sup>야 리 崇奉을 曷馳오。

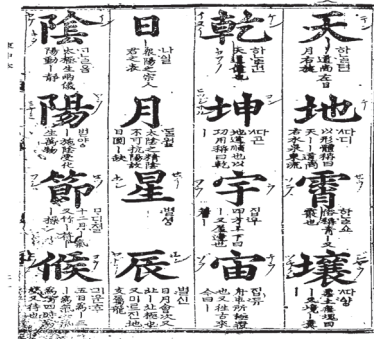
33 サ・チェドゥン（사재동）『訓民正音の創製と実用』ヨンラク、2014年、48-58頁参照。

34 キム・スウォン（김주원）他「訓民正音諺解本の正本制作に関する研究」『国語史研究』7号、国語史学会、2007年、参照。

で注釈を付けて、その区節をハングルで翻訳した。『月印釈譜』に掲載されているこの「訓民正音諺解」は、漢文で書かれていた『訓民正音』例義と解例のハングル学習教材としての制限を乗り越え、一般民衆まで、より簡単に使うことができるハングル学習教材の役割を果たすようになったのだ。もちろん諺解本は『訓民正音』の御製序文と例義の内容を直訳したものであるため、新しいハングル学習教材とすることはできない。しかし新しい文字の使用に慣れていない時期に、その新しい文字の定着のため、新しく制定された文字の実際の活用事例を示したという事実だけでも十分に注目するだけの価値があるだろう<sup>35</sup>。さらに『月印釈譜』の「訓民正音諺解」は、訓民正音（ハングル）を身に付けて、訓民正音（ハングル）を活用して編纂した本を読んでいけるようにする教育の順序と手続き<sup>36</sup>の模範を示している点でも、大きな歴史的意義を持っている。

### Ⅲ. ハングル学習教材の革新：『訓民正音』の諺文字母

『訓蒙字会』は1527（中宗22）年に崔世珍が書いた漢字学習書として、上中下3巻1冊で刊行された木版本で、天文・地理など33種に該当する漢字3,360字で構成されている。漢字学習書として『訓蒙字会』の最も大きな特徴は、やはり次の【図3】のように、各漢字の音と訓、つまり読みと意味をハングルで表示したというところにある。



【図3】訓蒙字会の本文例示

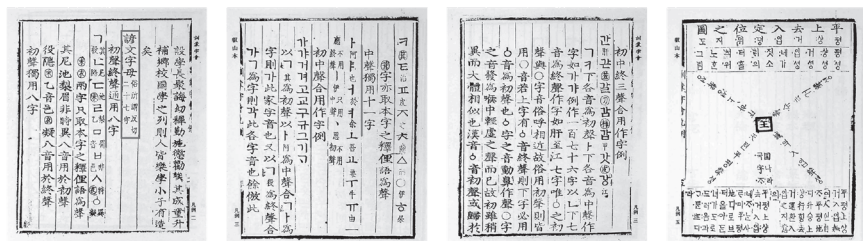
35 キム・ムボン（召早봉）『訓民正音、そして仏典諺解』ヨンラク、2015年、51－65頁参照。

36 チョン・ジニン（정진원）『月印釈譜、訓民正音に翼をつける』曹溪宗出版社、2019年、27頁。

このようにハングルで漢字の読みと意味を書いてもらおうと、一人でも漢字を勉強することができるようになるが、問題はまだハングルを知らない人々が依然として多いということである。このため、崔世珍は『訓蒙字会』の凡例の後ろに「諺文字母」という名前のハングル学習教材を掲載した<sup>37</sup>。これに関しては、凡例の九番目の条項に次のような崔世珍の説明がある。

そもそも下町の田舎に住んでいる人は言葉も理解できない場合が多いので、もうすぐに諺文字母をともに書いて、彼らに諺文を先に学ばせ、その次に訓蒙字会を学ばせることによって、ほとんどの人が知れる利点があるだろう。文字が通じない人もやはり諺文を全て学んで文字を分かるようにするので、たとえ先生がいなくてもやはり将来文字を通じる人になれるだろう<sup>38</sup>。

このようにして「俗に言う反切27字」<sup>39</sup>諺文字母を習うための、もう一つの教材が次のように提示された。



【図4】『訓蒙字会』の諺文字母（抜粋）

初期ハングル学習教材が官によって作られて普及したのと異なり、この「諺文字母」は、崔世珍という一人の個人的著述『訓蒙字会』に掲載されて流通した。しかしこの点が、ハングル学習教材としての「諺文字母」の普及に不利に

37 キム・ギョンヨン（김경용）『朝鮮前期書堂教育についての試論』『教育史学研究』第27集第2号、教育史学会、2017年、10-11頁参照。

38 『訓蒙字会』「凡例」には「凡在邊鄙下邑之人、必多不解諺文、故今乃并著諺文字母、使之先學諺文、次學字會、則庶可有曉誨之益矣。其不通文字者亦皆學諺而知字、則雖無師授亦將得爲通文之人矣」とある。

39 元来の訓民正音の28字母から「ㄱ」字がなくなり、27字に整理されたのである。



コ、ㄱ、ㄴ、ㄷ、ㄹ、ㅁ、ㅂ、ㅅ、ㅇ」を例に引いて、初声と終声を合わせて文字を作るやり方を説明し、「初・中・終聲合用作字例」では、「간 (肝)、간 (筭)、갈 (刀)、감 (柿)、갑 (甲)、갸 (皮)、강 (江)」を例に引いて、7音 (ㄴ、ㄷ、ㄹ、ㅁ、ㅂ、ㅅ、ㅇ) を終声として文字を作る方法を示しているといった具合である<sup>46</sup>。「諺文字母」のこのような作字例は、初・中・終声の用例をそれぞれ別に提示した『訓民正音』解例編の用字例と異なり、ハングル字母の合用方式と、その事例を一目で分かるように提示したという特徴を持っている。後に見る開化期の反切表が「諺文字母」の作字例とほとんど同じ内容と形式だということを考えれば、「諺文字母」の作字例がハングル学習にどれほど効果的だったのかは推して知るべしである。

第三に、『訓蒙字会』の「諺文字母」は、字音の順序を実用性と便宜性によって配列したという特徴も持っている。『訓民正音』で初声の字音を5音 (牙 = ア・舌 = ソル・脣 = スン・齒 = チ・喉 = フ) 構造によって基本の字と音の順に字母を配列したものと異なり、「諺文字母」では初声と終声に広く使われる8文字を先に配列し、初声にのみ使われる8文字を5音に合わせて配列したのである。中声母音字の場合には、「諺蒙字母」では『訓民正音』の制字原理 (天・地・人) を基準にして、開口度、つまり口が開く大きさに従って順に配列した。このように「諺蒙字母」は字音と母音の配列順序でも実用に重点を置き、発音の便宜性を考慮したものとして、ハングル学習の効果を一層高め得たのだ<sup>47</sup>。

最後に、「諺文字母」は字母の概念を拡張し、字母学習の方法を革新した。「諺文字母」を起点に、初声字音に限られていた既存の字母概念は、母音を含む全ての一文字を指す概念に拡張された<sup>48</sup>。そして「諺文字母」において、漢字でハングル字母の名前と発音の表示を行うことで、字母学習の便宜性と効果が画期的に高まった。例えば、「初声・終声通用八字」については「ㄱ [其役]、ㄴ [尼隱]、ㄷ [池 (末)]、ㄹ [梨乙]、ㅁ [眉音]、ㅂ [非邑]、ㅅ [時 (衣)]、ㅇ

46 『訓蒙字会』「諺文字母」では「初中聲合用作字例、가가거거고교구구그기ㅁ、以ㄱ其爲初聲以ㅁ阿爲中聲合ㅁㅁ爲字則가此家字音也又以ㅁ役爲終聲合가ㅁ爲字則ㅁ此各字音也餘倣此」とある。ㅁを終声にして作る「ㄱ」についての例は「初・終聲合用作字例」で既に説明したものとして省略したと考えられる。前掲『訓蒙字会研究』、62頁参照。

47 イ・サンギョ (이상규) 『直書其言』景仁文化、2018年、271-274頁。前掲イ・キムン『訓蒙字会研究』、62頁参照。

48 イム・ドゥンソク (임동석) 「表音機能漢字についての研究」『中国学報』35巻1号、韓国中国学会、1995年、参照。



○ [異凝]』といったように二文字ずつ書いて、前の文字は初声の発音、後ろの文字は終声の発音を表し、「初声独用八字」については「ㄷ [(箕)]、ㄷ [治]、ㅍ [皮]、ㅅ [之]、ㅈ [齒]、ㅊ [而]、ㅇ [伊]、ㅁ [屎]」のように名前と発音を付けた<sup>49</sup>。また、中声字音は「ㅏ [阿]、ㅑ [也]、ㅓ [於]、ㅕ [余]、ㅗ [吾]、ㅛ [要]、ㅜ [牛]、ㅠ [由]、ㅡ [應、不用終聲]、ㅣ [伊、只用中聲]、ㆍ [思、不用初聲]」のように、その一文字の発音を表示している。このように「諺文字母」では、ハングル字母に名前と発音法を付けてくれる字母を音に出してみると、それぞれ文字の名前が自然に覚えられ、その文字の用法まで身につけられる独創的な学習方式を採択したのだ<sup>50</sup>。

『訓蒙字会』の「諺文字母」がもっているこのような特徴は、それが単純に一つのハングル学習教材に止まるものではなく、非常に卓越的な価値を持ったハングル学習教材として認めさせることになった<sup>51</sup>。以後朝鮮時代に『訓蒙字会』の「諺文字母」をやや変形したり、要約した形のハングル学習教材が多く流通したという事実を見ても、「諺文字母」のハングル学習教材としての価値を推し量ることができる。

#### IV. その他のハングル学習教材

##### 1. 『真言宗』の諺本<sup>52</sup>

「真言」は仏教で神秘的かつ霊的な力と呼び起こすと信じられている呪文を意味する。真言は普通梵文を翻訳するのではなく、音そのままを覚える<sup>53</sup>。代表的な仏教の真言集は『五大真言』で、この本は本来1485（世宗16）年に5つの真言と、靈驗藥草が合綴されて刊行された<sup>54</sup>。次頁の【図5】に例示した『真言集』（1569年、宣祖2年）の中の真言は「ハングル音訳」、漢字音訳、梵字（サンスクリット語）の順に提示されている。

49 このうち「末、衣、箕」は「ㄱ [末]、ㅇ [衣]、ㅈ [箕]」という韓国語の意味を取り、字母の名称に使った。

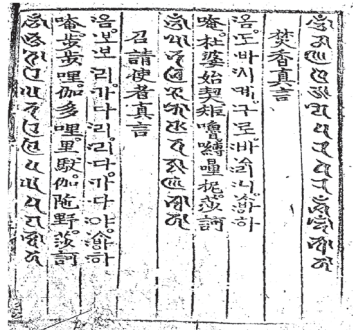
50 チェ・ウァン（채완）『「訓民正音」とハングル綴字法』『新国語生活』9巻3号、国立国語院、1999年、28頁参照。

51 前掲チェ・ウァン論文、19頁参照。

52 「諺本」は「諺文翻訳本」という意味でも使用するが、ここでは「諺文教材」という意味を持たせている。

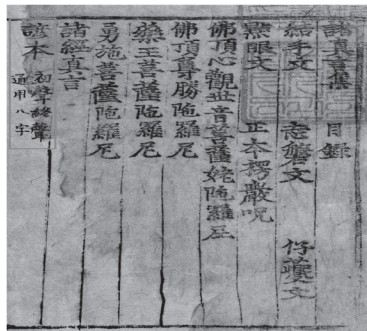
53 韓国民族文化大百科辞典（<https://encykorea.aks.ac.kr>）「真言」編、参照。

54 前掲ベク・ドゥヒョン『ハングル文献学』、348頁。



【図5】『真言集』の中の真言

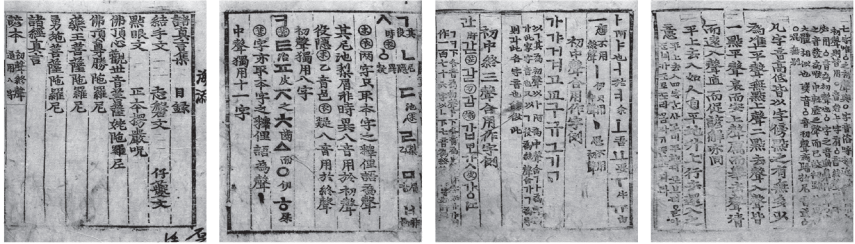
上の【図5】に示されているように、ハングル音訳部分には、読誦の便宜のため、途中で切って読むところを圏点（。）で表記している。このようにハングルで真言を表記するようになりながら、朝鮮時代の多くの真言集には、ハングル学習のための教材がともに掲載されている。この教材を通してハングルを身に付けたあと、真言を正確に読んで暗唱させるためだった。1569年に刊行された『真言集』（安心寺 설은）の〈目録〉には、梵本（실담장）<sup>55</sup>の前に、下の【図6】のような諺本（初聲終聲通用八字）が明示されており、本文にその内容が存在していない「諺本」がどのように構成されているのかを確認することができる。



【図6】『真言集』の諺本

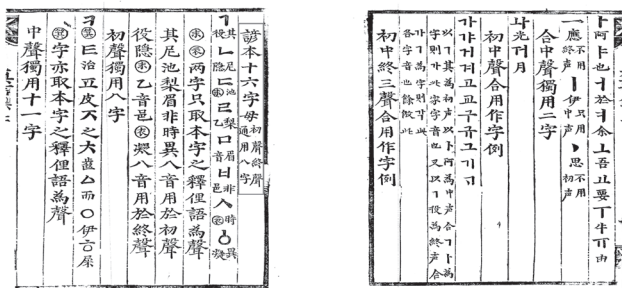
55 寺利では梵字を身に付けるための表を「梵本」という。

「諺本」の内容がともに収録されている真言集は、次の【図7】に示されている1658年の『真言集』である。



【図7】『真言集』（後刷り）<sup>56</sup>

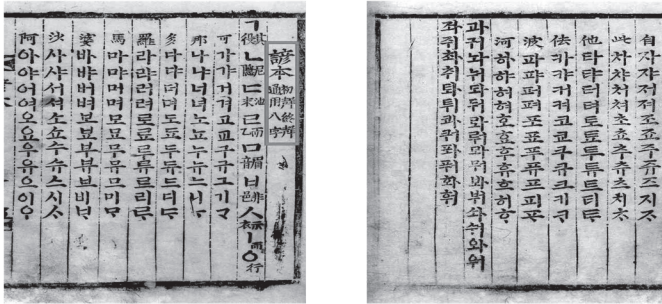
この『真言集』には、18頁から21頁まで、4頁にわたって「諺本：初声・中声通用8字」が提示されている。その内容は崔世珍の『訓蒙字会』の中の「諺文字母」とほとんど同じである。ただし「諺文字母」の最後に該当する字音の声調図と説明は削除され、3行ほどの簡単な説明だけが記述されている。1780（世祖4）年に刊行されたもう一つの『真言集』にも、次の【図8】のような「諺文字母」と類似した「諺本」、つまりハングル学習教材が掲載されている。



【図8】『真言集』の諺文

56 ここでいう「後刷」というのは、初刷本を刷ったあと、その本が再び必要な場合に、同一の版木を使って印刷したものを意味する。従って、本の需要が生じれば、刷り続けることを意味するもので、1658年以前の時期に初刷本が存在したことを意味する。前掲ベク・ドゥヒョン『ハングル文献学』、92頁、参照。

この他に初心者のための様々な仏教礼節を記述した本である『日用集』(1882年)にも<sup>57</sup>、下の【図9】のように「諺本」という名前のハングル学習教材が掲載されている。



【図9】『日用集』の諺本

上の【図9】に示された「諺本」は、2頁にわたって「反切表」形式でハングル字母と用法を記録している。これを通して時代の流れとともに変化するハングル学習教材の一面を確認することができる。

## 2. 韻書の諺文

韻書は漢字を、韻を中心に分類し、一定の順序に配列した辞典で、詩賦のような韻文の作成に必須である。中国の韻書での表音は伝統的に一つの音節を声母と韻母に分けて見る反切法が使われている。例えば、東の表音を「徳紅切」のように示すように、反切上字である「徳」から初声である声母を取り、反切下字である「紅」から初声を除外した残りの声母を取り、東の表音を完成させる<sup>58</sup>。韓国でも古代からこのような中国式の韻書の伝統を継いだ訓民正音が創製され、それ以後には韻書の漢字音表記に、表音文字であるハングルを直接適用するようになる。そして従来中国で一つの音節を声母と韻母に二分して見たのとは異なり、初声・中声・終声の三分体系を立て<sup>59</sup>、韓国式の韻書『東国正韻』(1448年)を作り、続いて『洪武正韻訳訓』(1455年)も出版した。

57 『日用集』は1869(高宗6)年に井幸和尚が刊行し、1882(高宗19)年に続刊された。

58 キム・ムリム(召早呂)『洪武正韻譯訓』新旧文化社、2006年、29頁。

59 前掲召龜翁『朝鮮時代の訓民正音發達史』、59-60頁。

朝鮮後期に訓民正音を使って編纂した代表的な韻書の一つには、英祖治世の音韻学者朴性源（1697－1767）が書いた『華東正音通釋韻考』（1747年）を挙げることができる<sup>60</sup>。



【図10】『華東正音通釋韻考』

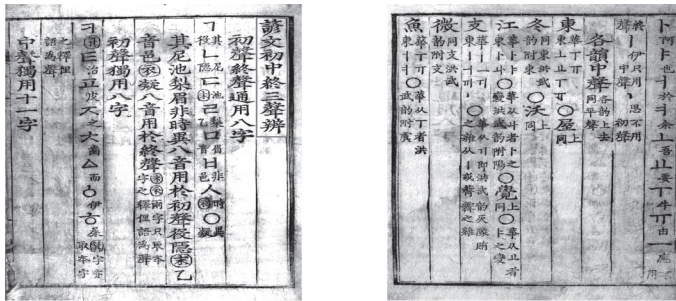
上の【図10】に見られるように、『華東正音通釋韻考』では漢字の下にハングルで直接中国漢字音と韓国漢字音を表記していた。既存の反切法よりもはるかに正確に漢字音を表記するものとして、両国漢字音の異同をたやすくはつきりと比較することができるものである<sup>61</sup>。しかしこのような韻書の活用性を高めるためには、人々にまずハングルの身に付けるようにさせ、これによってこの本には次頁の【図11】のような「諺文初中終三声弁」というタイトルのハングル学習教材が載せられるようになる<sup>62</sup>。

60 この本は朴性源が『三韻通考』と崔世珍の『四声通解』を参考に、韓国と中国の漢字音を比較して整理したもので、1787（正祖11）年には正祖が書いた「正音通訳序」を載せて刊行されている。

61 前掲キム・ムリム『洪武正韻譯訓』、20頁。

62 前掲キム・スロン『朝鮮時代の訓民正音発達史』、32頁。





【図11】『華東正音通釋韻考』の「諺文初中終三声弁」

『華東正音通釋韻考』に載ったこの諺文教材は『訓蒙字会』の「諺文字母27字」に倣ったものだが<sup>63</sup>、ただし、韻書の特性を生かし、平声・上声・去声・入声の4声に分けられ、母音が声調によってどのように変化するかを追加で説明している。

この他にも1678年に刊行された『排子禮部韻略』<sup>64</sup>では依然として従来の反切表を使いながらも、下編に「訓民正音」を附録として収録したことがあり<sup>65</sup>、1751（英祖27）年に刊行された『三韻聲彙』の巻頭にも、洪武韻字母之図とともに、諺字初中終聲之圖が収録された。このように、朝鮮後期の漢字音韻研究には、ハングルが広く活用され、これによって『華東正音通釋韻考』を始めとした様々な韻書では、ハングル（諺文、諺字）学習のための資料、つまりハングル学習教材が多様な形態で収録された。

### 3. 開化期教科書の反切表

1895（高宗32）年5月、高宗が勅令でハングルを国文、つまり国の公式文字と宣布しつつ<sup>66</sup>、ハングル（国文）を活用した様々な教科書が編纂された。そ

63 パン・チュンヒョン（방준현）『訓民正音通史』올제、1947年、イ・サンギュ（이상규）注解、2015年、190頁。

64 宋国の丁度が礼部の科試のために作った韻書で、韓国では高麗時代から愛用され、知られている。朝鮮中期からは、この『排子禮部韻略』の体制を改編した『三韻通考』が広く愛用され、中国字音と韓国字音をハングルで表記して補完した朴性源の『華東正音通釋韻考』にも影響を与えた。前掲방준현『訓民正音通史』、184頁、参照。

65 韓国民族文化大百科（<http://encykorea.aks.ac.kr>）参照。

66 前掲注3、参照。

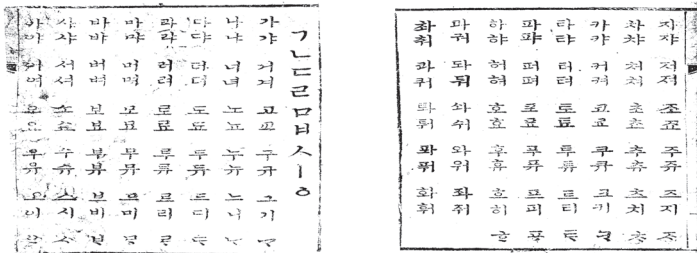


の中で学部で編纂された『新訂尋常小学』（1896年）の1頁を見てみると、次のような国文と漢文が混用されている。



【図12】『新訂尋常小学』

この国漢文混用教科書で注目すべきことは、この教科書の一番前の、下の【図13】のような国文学習資料が収録されているということである。



【図13】『新訂尋常小学』の反切表

【図13】のように、ハングル字母を反切式に配列している国文学習資料がいわゆる「反切表」である。この反切表は『訓民正音』の解例や『訓蒙字会』の「諺文字母」の中の作字例を、より簡素化し、一目瞭然にしたハングル学習教材ということができる。このような形態の反切表は、少ない分量でハングル字母と、その運用法を一目で見られるように圧縮しただけでなく、漢字を使わずただハングルだけになっているという特徴を持っている。このため早くから民間に広く使われてきたが、近代になってようやく学部で編纂した教科書にまで収録されたのだった。

## V. 結語

ここまで『訓民正音』の例義と解例から開化期国漢文混用教科書の中の反切表に至る、朝鮮時代の様々なハングル学習教材について検討してきた。論文の前半で明らかにしたように、ここでいう「ハングル学習教材」は、朝鮮時代にハングル字母とその運用法を身に付け、ハングルを読み書きできる能力を養うために作られ、使われてきたハングル教育用資料である。論文で考察したところに従えば、朝鮮時代の「ハングル学習教材」は、訓民正音創製と同時に登場した。それもそのはず、新しく創製した文字を簡単に学び、広く使うようにするためには、どうしてもこれを教え、学ぶための教材がなくてはならないからである。このようにして誕生したハングル学習教材が『訓民正音』の例義と解例である。そして漢文で書かれていた『訓民正音』の序文と例義をハングルで翻訳したものが「訓民正音諺解」である。これらの初期ハングル学習教材は官が主管して作り普及させたという特徴を持っている。時期がやや下り、崔世珍(1468-1542)が書いた漢字学習書『訓蒙字会』(1527年)に掲載された「諺文字母」という、かなり革新的なハングル学習教材が登場する。本論では「諺文字母」を、前代からは『訓民正音』例義と解例という初期ハングル学習教材の伝統を受け継ぎ、後代には仏教の真言集と様々な韻書はもちろん、近代まで影響力を及ぼした朝鮮時代の並外れたハングル学習教材として評価した。本論で検討したところによれば、「諺文字母」以後のハングル学習教材は事実上諺文字母を要約したり、若干変えたものに過ぎないとしても言い過ぎではないほどに「諺文字母」の影響を多く受けてきた。従って既に知られている漢字学習書としての『訓蒙字会』の優秀性に劣らず、「諺文字母」が持つハングル学習教材としての意義もまた、注目する必要がある。「諺文字母」が持っているハングル学習教材としての価値については、これからも様々な角度から多くの研究が行われねばならない。

一方、朝鮮時代の様々なハングル学習教材は、ハングル普及の直接の手段でありつつ、同時に朝鮮時代にハングルが実際どのように活用されてきたのかを示す格好の証拠資料でもあった。本論で紹介した様々なハングル学習教材は、ハングルを活用して編纂した様々な分野の書籍に付け加えられた形で存在することが多かった。『月印釈譜』の巻頭に「訓民正音諺解」が載せられて以降、訓民正音(ハングル)を身に付けて、訓民正音(ハングル)を活用し、編纂した本を読んで行けるようにすることが一つの慣行として定着した。『訓蒙字会』の諺文字母、様々な仏教真言集の諺本、朝鮮後期の韻書諺本や諺文、開化期の

教科書の中の反切表などが、すべてそのようなハングル学習教材流通の慣行をよく示している。同時に、様々なハングル文献の中に付け加えられたこれらのハングル学習教材は、朝鮮時代にハングルが実際どのように活用されていたのかを生き生きと見せてくれる証拠物件でもある。本論を通して、仏教書と漢字学習書、韻書、教科書など、ハングルが様々な方面に多様な目的と用途で活用されていたことを見ることができた。ハングルは、教育から疎外された下中層民や、婦女子などが主として使った文字ではなく、王室はもちろん、両班士大夫と平民、さらに奴婢に至るまで、朝鮮時代のすべての階級と階層が使用していた文字だったということを、もう一度確認することができる。今後朝鮮時代の教育でハングルがどのように活用されたかについて、より進んだ研究が行われ、ハングル創製とハングルの活用が持っている教育史的意義が一層生き生きと明らかになることを期待する。

参考文献：

1. 資料

『訓蒙字會』

『月印釋譜』

『釋譜詳節』

『龍飛御天歌』

『月印千江之曲』

『真言集』

『日用法』

『華東正音通釋韻考』

『排子禮部韻略』

『三韻聲彙』

(以上、国立中央図書館ホームページ <https://www.nl.go.kr> 原文資料参照)

『世宗實錄』

『世祖實錄』

『文宗實錄』

『正祖實錄』

『高宗實錄』

(以上、朝鮮王朝実録ホームページ [sillok.history.go.kr](http://sillok.history.go.kr) 参照)

2. 単行本

姜信沆『修訂増補 訓民正音研究』成均館大学校出版部、2003年。

姜信沆『訓民正音創製と研究史』景仁文化、2010年。

구자형編訳・学部編集局『新訂尋常小学』景仁文化、2012年（原文は1896年）。

김우림『洪武正韻譯訓』新旧文化社、2006年。

김무봉 『訓民正音、そして仏典諺解』 ヨンラク、2015年。  
김슬옹 『世宗大王と訓民正音学』 知識産業社、2010年。  
김슬옹 『朝鮮時代の訓民正音發達史』 ヨンラク、2013年。  
백두현 『한글文献学』 太学社、2015年。  
사재동 『訓民正音の創製と実用』 ヨンラク、2014年。  
안병희 『訓民正音研究』 ソウル大学校出版文化院、2007年。  
안병희 『国語史 文献 研究』 新丘文化社、2009年。  
이기문 『訓蒙字会研究』 ソウル大学校出版部、1971年。  
이상규注解・홍기문 『增補 正音發達史』 ヨンラク、2016年（原文は1946年）。  
이상규注解・방종현 『訓民正音通史』 올জে、2015年（原文は1947年）。  
이상규 『直言其言』 景仁文化、2018年。  
정진원 『月印積譜、訓民正音に翼を付ける』 曹溪宗出版社、2019年。

### 3. 論文

강창식 「諺文字母の作成主体と時期について」 『言語と情報社会』 第22号、西江大学校言語情報研究所、2014年。  
김경용 「朝鮮前期書堂教育についての試論」 『教育史学研究』 第27集第2号、教育史学会、2017年。  
김기영 「『訓蒙字会』を中心とした崔世珍の二重言語教育に関する研究」 公州大学校博士学位論文、2008年。  
김무봉 「積譜詳節 卷20研究」 『仏教学研究』 34集、仏教学研究會、2013年。  
김유범 「『訓民正音』〈例義〉と〈解例〉の成立過程についての再検討」 ウリマル学会 『ウリマル研究』 55集、2018年。  
김인희 「朝鮮時代士大夫の한글使用と意味」 韓国学中央研究院 『精神文化研究』 35巻4号、2012年。  
김주원他 「訓民正音諺解本の正本制作に関する研究」 『国語史研究』 7号、国語史学会、2007年。  
임동석 「表音機能漢字についての研究」 『中国学报』 35巻1号、韓国中国学会、1995年。  
정광 「訓民正音の〈諺解本〉—高麗大図書館六堂文庫所蔵の『訓民正音』を中心に」 『語文論集』 88、民族語文学會、2020年。  
정우영 「『訓民正音』解例本の「例義篇」構造と「解例篇」との相關關係」 『国語学』 第72集、2014年。  
정우영 「訓民正音と仏教敎典の相關關係研究」 『語文研究』 43巻、4号、韓国語文敎育研究會、2014年。  
채완 「『訓民正音』と한글綴字法」 『新国語生活』 9巻3号、国立国語院、1999年。

### 4. その他

韓國民族文化大百科辭典 (<http://encykorea.aks.ac.kr>)  
我々の歴史ネット ([contents.history.go.kr](http://contents.history.go.kr))

訳出に当たっては、原著者のお一人 朴鐘培教授の校閲を経たほか、金龍 韓國敎員大学敎授の多大な助力を得た。